

有田伸著

『韓国の教育と社会階層』

——「学歴社会」への実証的アプローチ——

東京大学出版会、2006年

本書は、2005年1月、東京大学大学院総合文化研究科に提出された博士論文を一部修正したものである。著者は、本書の目的を次のように設定している。

本書は、韓国におけるひとびとの高い教育達成意欲を生み出している学歴主義的社会イメージ、すなわち「学歴の社会経済的地位規定効果がきわめて大きく、教育機会自体は平等に配分されているため、教育を通じた世代間移動が容易な社会である」という社会イメージは、果たして現実の社会構造を適切に反映したものであるのか否かを、国際比較と時系列比較の観点から検証すること、またそれによって、ひとびとの教育達成意欲の高さがいかなる社会的存立基盤を持ち、韓国社会の資源配分において「教育」がいかなる役割を果たしているのかを明らかにすること、を試みるものである。

本書は、序章・終章と、次のような章構成の第I部・第II部から成る。

I 理論・構造・制度

- 1章 学歴と地位・報酬配分に関する理論的考察
- 2章 韓国の社会階層構造と産業化
- 3章 韓国の学校教育制度と選抜システム
- II 経済的報酬・職業的地位・社会移動
- 4章 賃金水準に対する学歴効果とその変化
- 5章 職業的地位決定における学歴効果とその変化
- 6章 教育達成と社会階層・階層移動

第I部は、問題の背景と文脈を考察したもので、

これを基礎として第II部で各課題の実証分析を行っている。具体的には、韓国における教育達成意欲（いわゆる教育熱）が「強度」「持続性」「普遍性」の高さという特徴を持つことから次の3つの問いを設定し、問い①と②の答えを4・5章で、問い③の答えを6章で追究している。

問い①

「韓国において学歴取得がもたらす社会経済的便益は、ひとびとの教育達成意欲の『強度』を説明し得るほどに大きなものなのか、またもしそうだとすればそれは何故なのか」

問い②

「韓国において学歴取得がもたらす社会経済的便益は、急速な教育拡大にもかかわらず、依然として高いものであり続けているのか」

問い③

「高い学歴を獲得すれば、出身階層にかかわらずひとしく高い地位を得られるのか。また、教育機会配分には大きな階層間格差が存在せず、韓国は世代間階層移動が本当に容易な社会なのか」

著者による結論の要点は次のとおりである。問い①に関しては、学歴取得の社会経済的便益のうち、金銭的便益とともに重要なのが職業的地位の上昇効果であり、韓国における人々の「高い職業的地位獲得意欲」の本質は、職業に付随する社会的威信の獲得にある。

問い②の答えとしては、韓国における大学進学目的は「所得上昇効果」より「職業的地位上昇効果」の方が遙かに重視される傾向があり、このような進学目的を考慮すれば、大卒学歴の持つ学歴効用は依然として高いままであり続ける。

問い③に関しては、「教育を通じた世代間移動が容易な社会である」という社会イメージを部分的に否定して、世代間階層移動の機会は、他のアジア諸国に比べてそれほど豊富に存在するわけではない、としている。

評者のみるところ、本書の特色は次のような点にある。第1は、multidisciplinary approachである。換言すれば、「さまざまな学問を学んできた……筆者のこれまでの研究の総まとめである本書」は、社会学・経済学・教育社会学さらには文化人類学など諸分野における先行研究を集大成したものである。

第2は、統計に基づいた計量分析を主としながらも、分析対象の文脈・背景や人々の主観的側面を重視した分析の手法である。それは非経済的な条件の重視にもつながるが、著者の言う「より見えづらく、捉えづら非経済的条件」の分析こそ本研究のユニークさがある。ただ、「見えづらく、捉えづらい」ものや主観的な側面の解釈は、研究者によって異なる余地があることは否定できない。

第3は、著者らの共同研究チームによる調査を

はじめ、アジア諸国（地域）や欧米と韓国との比較が随所で行なわれていることである。著者が言うように、「明確な比較の視点に立った上で『何が韓国社会の特徴なのか』を検討した研究はほとんど存在しない」状況であるならば、本書は、比較教育学の成果としても韓国の学界に、そして日本の学界にも貢献するであろう。

とはいえ、本書にも限界はある。分析対象がほとんどの場合男子に限定されていること、1990年代末の経済（IMF）危機以降の韓国社会の変化については全く言及がないこと、などである。しかし、それが本書の価値を減じるものではない。本書は、韓国の教育と社会階層の関連を追究しようとする者が須らく踏まえるべき研究成果である。

韓国社会の変化は早い。端的な例として教育界においても、特殊目的高校（科学・芸術・外国語高校など）や自立型私立高校の台頭によって中等教育の機会均等が質的に変化しつつある。その影響は、やがて大学入試戦線に、延いては社会階層構造へと及んでいくであろう。

（稲葉継雄 九州大学）